<エッセイ ： 小特集「パンデミックに思うこと」>
メディア・プラットフォームとパンデミック

著者	エルナンデス・エルナンデス アルバロ・ダビド
雑誌名	日文研
巻	65
ページ	22-27
発行年	2020-09-30
URL	http://doi.org/10.15055/00007545

メディア・プラットフォームとパンデミック

アルバロ・ダビド・エルナンデス・エルナンデス

今、私たちはパンデミックの経験から何を読み取るべきなのだろう。それは存在する幅広い研究分野において、何かを考え直す、またはすでに考えられた説を確認する機会を提供しているに違いない。このパンデミックが見せる一つの姿に、大衆文化の現在を考えるための手がかりがある。近年、人気と影響力を拡大し続けてきた「メディア・プラットフォーム」もその一例である。

二〇二〇年三月一一日、WHOによってパンデミックが宣言された。その段階で、メディアだけではなく、すでに日常生活の隅々にまで新型コロナウイルスへの懸念が浸透していた。私の場合、通勤電車の中でスペイン語と英語、日本語のニュースからその展開を追っていた。当初各国の状況によって、メディアが伝える危機感には温度差があった。例えばメキシコでは、COVID-19の死亡率は二〇一九年に三万四五八二人の死者を出した公式の殺人統計と対比され、パンデミックが軽視されたこともあった。ところが徐々に危機感が広がり、それは肌感覚でも感じられるようになった。満員だった京都線と神戸線ではだんだんマスク姿が増えていき、乗客の人数は次第に減少していった。

子供の時から見慣れているパニック映画の教育成果かもしれないが、パンデミックで溢れた混乱した情報から、不信感と希望や期待の緊張関係を軸にした分かりやすいストーリーのようなものも浮かび上がったように見えた。

しかし、そもそも新型ウイルスの出現のような自然界の出来事には意味はないはずだ。パンデミックは人類や社会の悪い行い（例えばこの文脈では、自然破壊を促進すると同時に、公的医療保険制度を放置してきた新自由主義の責任がよく取り上げられる）に対する一種の天罰という前近代的な考え方は、もはや通用しないはずだ。コロナを通して私たちに届けられているメッセージは、天あるいは自然界からのメッセージではなく、メディアからのものだろう。特に、自然界の出来事がニュースの中心になっている今のパンデミックの特徴は、ブルーノ・ラトゥールの『虚構の「近代」――科学人類学は警告する』（新評論、一九九一／二〇〇八年）の冒頭を連想させる。「コロナウイルス」を中心に、極めてローカルな出来事がグローバル規模の問題と直接的につながり、科学的なデータや仮説と政治的な言説、社会的あるいは経済的な解説と感情に訴える宣伝や宣言が混ざり合っている。

毎日限られた時間しかないのに、次々と情報が増える。この消化しきれない氾濫情報をどう読み取っているのかというと、実は読み取れていないということが指摘できるかもしれない。多くの場合、私たちはメディアが提供する情報そのものを受け止める前に、ニュースやストーリーの総体を構成する論理を読み取る段階にとどまっている。その論理というのは、矛盾に満ちているままの情報より単純で分かりやすいのである。一見、無秩序に混ざり合っているように見える自然科学的な問題と政治的・社会的な問題は毎日の展開において明確に切り分けられ、一貫性のあるストーリーとして再編成されているように見える。そう考えると、このス

トーリーには「善と悪の戦い」を描くかのように、私たちの社会が直面する課題の姿がなぞられているとも言える。少なくともそういう側面もあると思う。

医師や看護師ら、私たちの命と日常を守ってくれる医療技術者、また統計や情報分析のエンジニアがいる。彼らの動機は明確であり、そして彼らのツールとなっているのは普遍的な科学的根拠を持つ明瞭な知識と技術である。彼らに対して期待と信頼が集中している。その一方、不信の中心になっているものもある。日本語、スペイン語、英語、どれを読んでも、不適切な対応と政策で疑われる政府と政治家、情報の隠蔽や陰謀論、科学的根拠のない噂、偏ったメディアまたは意図的あるいは無意識に混乱を広げる「無責任者」などがその例である。彼らの動機は不明瞭であり、かつその手段には科学的な信憑性が不足しているので不信感が募る。極端に単純化するなら、人そのものへの不信感があり、技術や科学は人の動機を通さないからこそ信頼性の根拠となり得る。

この信頼性の担保となる技術や科学的な知識という「非人間的なもの」に注目したい。なぜなら、人の動機の理解を必要としない「非人間的なもの」には、「メディア・プラットフォーム」と呼ばれているものと同じような論理が見られるからである。特に、「ソーシャル・ディスタンス」において求められる人と人の新しい「つながり」のあり方に関してそう言えると思う。

大衆文化の中で数年前から「メディア・プラットフォーム」と呼ばれるシステムやサービスが人気を集めてきた。何かを支える単なる土台という意味から、コミュニケーションと情報媒体技術においては特にその「プラットフォーム」こそが極めて重要な意味合いを持つようになった。YouTube はその典型例であろう。二〇〇六年に YouTube という動画投稿サイトが

Google に買収され、米国社会をはじめ大きな反響を及ぼすようになった。マグウィガンが指摘したように、同年に発行された『タイム』誌の「ネットでは、カメラがあれば誰でも歴史を変える力がある」(Jim McGuigan, *Cool Capitalism*. Pluto Press, 2009, p. 84) という記事の内容から読み取れるように、「集合知」や「参加型文化」と呼ばれていたインターネット上の無数のユーザーの自由表現活動には「文化の民衆化」の実現が期待された。

この当時から YouTube は自らそのサービスを「メディア・プラットフォーム」と定義していた。表現の自由と民衆の参加を連想させる政治的な意味合いを持っている「プラットフォーム」という言葉の選択は偶然ではなかったと思われる。二〇一〇年に Google がバイアコムという米国のメディア・コングロマリットに対して勝利した訴訟はそれをはっきりと示してくれた。YouTube はユーザーに単なる技術的なプラットフォームを提供しているだけなので、どのように利用されるかに関しての責任はなく、むしろ管理した場合、表現の自由が損なわれるので、プラットフォームとしての機能が阻害されるという論理が成り立つ。この論理には「メディア・プラットフォーム」という言葉に託された理念が窺われる。角度を変えてみれば、ユーザーの活動が信頼できない場合であっても、「プラットフォーム」という技術は信頼できると言える。

大衆文化においては、この「メディア・プラットフォーム」とその理念は、数年前から注目されていた「メディア・ミックス」と対比できる。「メディア・ミックス」は言葉通り、複数のメディアを活用しながら、特定の作品を展開させるものである。それに対して、「メディア・プラットフォーム」は、作品や文化商品のデジタル化とモバイル・インターネットの普及において、コミュニケーション機能を取り入れた形で、如何なる文化商品や作品であっても、誰も

が使える標準的なシステムに再編成するサービスであると言える。

この「メディア・プラットフォーム」も「メディア・ミックス」も、「つながり」をキーワードにしている。複数の文化商品、作品、メディアとサービス、そしてそのユーザーや消費者をつなぐ点において類似している。ある意味、この異質なもののつながりによって一種の包括的な総体を作っていると言える。ところが、「メディア・ミックス」と「メディア・プラットフォーム」の間には大きな違いがある。「メディア・ミックス」の場合は、複数のメディア媒体が想定され、媒体の多様性の中で、特定の作品や文化商品とそれらを求める消費者によって「つながり」が成り立つ。一方、「メディア・プラットフォーム」の場合はそれとは逆に、「メディア統合」と呼ばれるものにおいて、あらゆる文化商品や作品が「コンテンツ」として標準化される。ここでは、「つながり」を担保するのは人ではなく、誰でも使える「標準的なプラットフォーム」である。この仕組みにおいては、メディアをつなぐ消費者やユーザーの動機はますます不要になってくる。アルゴリズムであり、プラットフォームのアーキテクチャー（構造）であるため、人の動機を不要とする「つながり」のシステムへの期待が高まるように見える。

このように見るなら、「メディア・プラットフォーム」の論理と、パンデミックにおける人への不信感や技術や科学的な知識への期待感という論理の間には共通点が感じられる。

「現在我々が直面している「情報化するコミュニケーション」の問題を「プラットフォーム」の例から見ると「信頼性」の問題が見えてくる。社会には共通の価値観、世界観、または政治的な共同体など、他者同士の信頼性を担保する共有の基盤が必要とされている。インターネットの場合、多数の他者同志の相互作用は「プラットフォーム」と呼ばれているものによって担

保されている。プラットフォームを信頼すれば、他者を信頼しなくても、相互作用が可能になる。プラットフォームは便利な反面、コミュニケーションにおける「理解」を必要としない「つながり」は閉鎖空間のような「自分だけの現実」という「切断」を促進する側面もある。」（エルナンデス「趣味と表現活動――情報プラットフォームの社会学」『社会学（3STEP）』油井清光・白鳥義彦・梅村麦生編、昭和堂、二〇二〇年）と、今年の初め、コロナのことを意識し始める頃に書いた。

パンデミック以前から、「メディア・プラットフォーム」には信頼性の担保という役割が期待されていた。コロナウイルスが促進させた、人やその動機への不信感を背景に、そして「ソーシャル・ディスタンス」への要請においても、この役割がとても期待されている。つまり、プラットフォームは清潔な「つながり」で「ソーシャル・ディスタンス」を埋めてくれるのである。

（国際日本文化研究センタープロジェクト研究員）